浦賀文化

第84号

令和８年１月１日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

通訳官のいたところ

第七三号・七四号で浦賀奉行所に派遣されたオランダ通詞たちのことをとりあげた。オランダ通詞とはごく簡単に言えば異国船来航時に通訳官として浦賀に派遣されていた者だが、今回はそんなオランダ通詞たちの居たところについてとりあげる。

天文台詰であるオランダ通詞たちが江戸から浦賀に派遣されてくるようになるのは天保一四年（一八四三年）からである。以後、一期三年として浦賀に詰めることになるが、その任期中彼らはどこにいたのだろうか。

「臼井家文書」を見ると、弘化元年に浦賀奉行土岐頼旨が通詞の居所について、「奉行所の修繕にともない長屋に通詞の居所を設けるつもりである」と老中に上申している。これが「なるべく経費が手軽に済むように」とされつつ許可されていることから、奉行所の裏門続きの長屋に通詞の居所がつくられたであろうことが推測される。さらに、安政期の浦賀奉行所の間取り図を見ると、表門の脇に二部屋ほど「通詞部屋」とあるのが確認できる。位置は変わっているのかもしれないがいずれにしろ奉行所の中に通詞が詰めていたことがわかる。因みに通詞は元々長崎の町役人であったため、武士身分ではなく浦賀奉行所に詰めていた町人ということになる。

一期三年の周期で浦賀に詰めた通詞たちがいた一方で、弘化四年（一八四七年）からは、一年のうち夏から秋までの間だけ浦賀詰めを命じられた者たちもいた。その間、彼らはどこにいたのだろうか。安政期の間取り図に通詞部屋が二つあるのはそのためかとも思われるが、確証はない。

「新横須賀市史」を見ると、弘化四年（一八四七年）の浦賀奉行浅野長祚・戸田氏栄連名の伺書がある。これには、与力・同心が増員したことを受けて、与力・同心の屋敷地や台場、浦賀奉行所の出先機関である三崎の役宅を増築することなどが書かれており、通詞が三崎の役宅に夏から秋の間詰めていることが述べられている。そのことから、夏秋詰の通詞が三崎に詰めていたことがわかる。

この夏秋詰となった通詞の一人に立石得十郎がいる。立石は、嘉永三年（一八五〇年）から夏秋詰の命を受け浦賀に派遣され、その任期中の嘉永六年（一八五三年）のペリー来航時に堀達之助とともに通詞として応接にあたった人物である。そんな彼が浦賀に来るまでの記録を少し見てみよう。

前任の天文台詰通詞吉雄作之丞の交代として江戸に着いたのが嘉永三年正月三日のことである。挨拶廻りを済ませ、まず天文台測量所構内の小屋に移る。三月二九日、浦賀への夏秋詰のため在府浦賀奉行の戸田氏栄（この時浦賀奉行は二人制で、一年交代で江戸と浦賀それぞれに勤めていた）に身元が引き渡される。その後、早々に浦賀に出立する予定であったが、持病により出発を延期。およそ一ヶ月後の四月二七日、ようやく浦賀に向けて出発する。品川から神奈川、鎌倉雪の下を通って浦賀着は四月二九日。浦賀奉行所に到着を報せ、当時浦賀に詰めていたオランダ通詞加福喜十郎の役宅で休息している。この「役宅」は先述の浦賀奉行所内の通詞部屋のことだろうか。五月一日、浦賀から三崎までの人馬賃銭（交通費）を受け取り、一四日に浦賀奉行から直接異国船の乗留方について話をされ、翌一五日辰上刻（午前七時頃）、浦賀から三崎に向け出発して上宮田村を通って同日未上刻（午後一時頃）三崎に到着。しばらく三崎で御用を勤め、九月二五日卯下刻（午前六時頃）に三崎を出立。帰路は往路と同じ道を通って同日午上刻（午前十一時頃）浦賀に到着する。十月一日、今度は江戸に向け浦賀を出立。これまではすべて陸路であったが、帰路は船で横須賀から金沢に渡海、そこから神奈川まで行き一泊、陸路で江戸に向かい十月三日に到着し、在府奉行戸田に帰着届けを出している。

一例ではあるが、オランダ通詞はこのように長崎から江戸、江戸から浦賀、浦賀から三崎へと御用のために居場所を転々とした者もいたのである。

（山本　慧）

※天文台…天文・歴術・測量・地誌編纂・洋書翻訳をおこなう幕府の機関。通詞は洋書翻訳や学術研究業務を担っていた。

★参考文献・史料

・『阿蘭陀通詞の研究』片桐一男（吉川弘文館　一九八五）

・「詳解浦賀詰通詞」山本慧（『開国史研究』第一三号二〇一三）

・『浦賀奉行所跡―浦賀奉行所〔役所〕跡の発掘調査―』（横須賀市教育委員会　二〇二一）

・『新横須賀市史　資料編　近世１』

・「荷蘭通詞立石某書留」外務省引継書類三三八　東京大学史料編纂所所蔵

発行：浦賀行政センター　編集：浦賀コミュニティセンター分館　〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1 ☎ 046-842-4121

千代ケ崎砲台一三〇年のあゆみ

―太平洋戦争から終戦・戦後そして現在―

前号では大正時代末に千代ケ崎砲塔砲台が竣工し、昭和時代初めに関連施設が建設され、千代ケ崎の地一帯が軍用地となったことについてお伝えしました。今号では、その後の太平洋戦争から終戦、戦後の姿そして現在の千代ケ崎砲台を見ていきましょう。

山上の糎榴弾砲砲台と砲塔砲台はともに東京湾要塞を構成する砲台として東京湾口の守りに就きます。しかし、太平洋戦争の戦局の悪化に伴い、昭和一九年（一九四四年）には榴弾砲砲台から二八糎（センチ）榴弾砲を取り外し、陸軍が想定した連合国軍の本土上陸地点である房総半島へ移送しました。その際、砲塔砲台の四五口径三〇㎝加農は残されました。

昭和二〇年（一九四五年）の終戦後、千代ケ崎の地は大蔵省に帰属した後、農水省へ移管され、その後農地として民間に払い下げられました。地元の方に伺った話では、榴弾砲砲台の砲座周囲は畑として開墾されていたそうです。その後、昭和三五年（一九六〇年）には榴弾砲砲台の右翼観測所を除く部分を防衛庁が購入、海上自衛隊の送信所が設置され、再び一般人の立ち入りは禁じられました。平成二二年（二〇一〇年）、通信のデジタル化に伴う施設廃止の話が海上自衛隊横須賀地方総監部から横須賀市教育委員会に伝えられ、保存についての協議が始まりました。その結果、以前から国の史跡指定について協議が行われていた猿島砲台跡と合わせて国の史跡指定に向けて進むことになり、海上自衛隊千代ケ崎送信所の施設廃止後、平成二七年（二〇一五年）に猿島砲台跡と二遺跡同時に「史跡東京湾要塞跡」として国の史跡に指定されました。

史跡指定後に横須賀市が開始した史跡整備事業では、自衛隊時代に埋没した第三砲座の発掘調査や各種調査と並行して、一般公開に向けて公開箇所やその方法について有識者からの助言を受けながら市役所内の関係部署と検討を重ねました。千代ケ崎砲台跡の最大の魅力は、時が止まったかのような地下施設など竣工当時の姿を良好に残しているところです。見学者にその魅力を最大限に感じていただく説明方法として、説明板を極力減らして代わりにガイドを養成することにしました。

公開に先立ち令和二年（二〇二〇年）に「千代ケ崎砲台跡活用サポーター養成講座」を開講し、コロナ禍の中にもかかわらず多くの受講生の参加を得、修了生らにより「千代ケ崎砲台跡活用サポーターの会」が設立され、令和三年（二〇二一年）十月から土・日・祝日限定の一般公開を開始しました。公開日には千代ケ崎砲台跡活用サポーターの会の会員がボランティアガイドとして現地を案内しています。現在三期生まで募集を行い、千代ケ崎砲台跡についての歴史や遺構の構造などの分かりやすい解説は見学者から好評をいただき、横須賀の魅力発信に貢献しています。また、毎年桜の季節には「さくらまつり」を開催し、海側に広がるオオシマザクラの可憐な姿を楽しみに多くの見学者が来てくださるようになりました。

千代ケ崎砲台跡と猿島砲台跡で構成される史跡 東京湾要塞跡は、軍事施設としては日本で初めて国の史跡に指定された文化財です。２つの砲台跡が保護・公開されている姿が、見学された方に平和を考えるきっかけとなっていただければと願っています。

（教育委員会生涯学習課　川本真由美）

春の千代ケ崎砲台跡

さくらまつり
令和８年３月下旬から開催予定

浦賀コミセン分館よりお知らせ

当館では浦賀の歴史を展示した郷土資料室を併設しております。
浦賀奉行所与力中島三郎助や浦賀ドックの資料、黒船サスケハナ号や咸臨丸・奉行所の模型等を展示しております。

冬休みを利用して郷土の歴史に触れてみませんか。

展示室見学時間：９時～17時
※12/29(月)～1/3(土)はお休みです

笑話一題

先日、写経体験に参加してきました。最初は筆ペンで文字を書くことに不安があり、上手く書くことにばかり意識していました。しかし、丁寧な指導と会場の静かな雰囲気のおかげで、しだいに「上手に書く」ことよりも「一文字一文字に集中して丁寧に」…と、気づいたら無心で書いていました。すると普段の忙しさや悩みが消え、写経を終えた後は、心がすっきりとしていてとても清々しい気持ちになりました。

普段経験できない貴重な時間を過ごすことができ、自分自身を見つめ直す大切さを実感しました。これからも、この落ち着いた心を日常生活にも活かしていきたいと思いました。

皆さんも興味がありましたら、とても良い体験ができますので、おすすめします。

（K・U）